

新刊

□江村一子：メルヘンの植物たち A5. 150 pp. 2010. ¥1,600 + 税. 研成社. ISBN 978-4-87639-508-8 C1045.

ブランタのドイツ植物誌でおなじみの著者が、グリム童話をはじめとする北欧のメルヘンや神話に登場する植物についての本を用意していると聞いていた。私は子供向けの本だと、なんとなく考えていたが、できてみたらそうではなかった。話題にされた植物は「はしばみ」「ねずの木」「タンネンバウム」「三色すみれ」など13種類、それに「メルヘンに登場する他の植物たち」の14の見出しより成る。はしばみを例にとると、はしばみ（ヘーゼルナッツの木）—シンデレラに幸運をもたらした木（鉱脈や水脈の探知棒として活躍した木）と主題と副題が並び、グリム童話から著者が意識した物語の要約が記される。日本の童話では触れていない暗い面も、そのまま記されている。それから、この植物についての伝説や利用法や風習に加えて、著者自身の見聞が、彼女独特の語り口で記される。最後に「植物メモ」として、この植物の正式和名「セイヨウハシバミ」を見出しとして、学名、ドイツ名、英語名、簡単な記相、分布、生育地、花期、ヨーロッパの近縁種、日本の近縁種など、植物学的な解説がある。目次や本文で「はしばみ」という名前や漢字が使われていて、鋭い人は「ヨーロッパにはハシバミはないのに」といぶかしく思うだろうが、一々正式名を使って文章がうっとうしくなるのを避けるために、わざと近縁種名を平仮名や漢字で表現しているのだ。だから日本と同じ種のベニテングタケは、はじめから片仮名表記になっている。北欧神話など真面目に読んだことのない私には、あらためて教養をつけられる本である。参考文献として40篇が挙げられているが、当然ながらほとんどがドイツ語の本である。（金井弘夫）

□加藤信重：シーボルトが蒐集したシダ標本 A5. 373 pp. 2010. ¥7,000 + 税. 思文閣出版. ISBN 978-4-7842-1550-8 C3045.

著者は20年にわたって、ライデンのオランダ国立植物学標本館に保存されているシーボルトの蒐集品のうち、日本産シダ類を集中的に調査研究し、記録してきた。本書はこれまでの結果を、著

者の定年を期にとりあえずまとめたもので、まだ手をつけていない資料も多いという。

まず採集者別の標本数は、シーボルト88種190点、ビュルガー77種165点、ピエロー24種26点、テキストール24種33点、モーニッケ15種19点、ツェンペリー3種4点、ライト22種22点、マキシモヴィッチ44種46点、オーダム2種2点、フォーリー4種4点、伊東圭介60種85点、水谷助六18種23点、大河内真18種23点、桂川甫賢2種2点、平井海蔵6種6点、中山作三郎1点、須川長之助7種7点と、人物の紹介とシーボルトとの関係を述べた後、和名、学名、標本番号が列記されている。続いて種類別の記述に入り、まずライデンの標本番号の説明がある。たとえば908, 345-51は1908年の345日目（つまり12月11日）に台紙に貼りつけた標本の51番目のものという意味だとのこと。そういうタグが用意されていて、標本と共に台紙に貼りつけるのだそう。一日の貼り付け標本数が決められているわけではないだろうし、複数のマウンターが仕事をしているはずだから、こういうナンバータグをどうやって用意するのか、考え込んでしまった。1908年にはオートナンバリングはできていなかったろうし、ましてパソコンで番号を管理したわけでもない。標本番号から所蔵標本数がわかるというような、単純なものではない。とにかく種類ごとに標本一点ずつの詳細な記述、ラベルやメモの詳しい内容が、写真と共に紹介され、これが本書の主部を占める。シーボルト標本の銘々録というところだが、シダだけでもまだ終わっていない。著者のおそるべき執念が読みとれる作品である。調査した全ての標本を集録したDVDが、付録として付いている。（金井弘夫）

□野国昌慶（編著）：沖縄の美しいクロトン A4. 163 pp. 2010. ¥5,000 + 税. 光文堂印刷株式会社. No ISBN number.

著者が収集し、栽培した観葉植物クロトン *Codiaeum variegatum* の園芸品種202種を掲載した図鑑。2部構成で、第1部は主要文献資料集として、1. クロトンの原産地及び原種、2. クロトンの伝播、3. クロトンの分類、4. クロトンの園芸品種名、5. 桃原農園植物総目録、6. クロトンの園芸品種名の考察、7. 台湾のクロトン、8. 国別クロトンの標準名、9. クロトンの病気と害虫、10. 追

記が記載されている。内容は過去の文献をまとめたものだが、特に、沖縄にクロトンが伝播された経緯が詳しく記載されている。

第2部は、202種の園芸品種のカラー写真と解説が記載されている。クロトンの葉形は千差万別なので、便宜的に葉の形を、先端が尾状に伸びるか、全縁か、赤色斑点があるか、螺旋形かなどで分類して配列している。園芸品種名のないものについては、著者が苦渋の決断の末、命名したとある。著者のつけた園芸品種名は「月照の都」、「愛彩星」「紅絹ノ剣」「跳舞蛭」など情緒的な名称も多い。命名に苦労したことが伺える。クロトン愛好家には必読の一冊である。(近藤健児)

□中村 明：日本語 語感の辞典 B5. 1,181 pp. 2010. ¥3,000+税. 岩波書店. ISBN 978-4-00-080313-7 C0581.

学生に他人の文章を読ませて意見を書かせるのと、作品は氏名つきで公表するぞと断っているのに、とにかく何か欠陥を見つけて最大限の強い言葉でコキ下ろす者が多い。近頃は学校でディベートの練習をするそうだから、そういうやり方が自己表現の適切な手段と思っているのだろうか？自分の文章表現が自分の人格を反映しているのだと言うことに気付いた上、相手にも配慮した用語を選ぶ気配りがほしいものだ。

本書はある「ことば」について、それがどんな語感を持ち、どんな場合に使われるか、その用例および類義語が記されている。見出し語は約一万件とのこと。たとえば「ばか」の見出しでは、『馬鹿／莫迦。会話や軽い文章に使われる「愚か」の意のことば。』そして日常会話や文学作品の用例が列記されたうえ、関東人と関西人では受け取り方が違うこと、およびその推定理由が述べられたのち、類義語として「あほ、あほう、たわけ、とんま、まぬけ」が挙げられている。それぞれの見出しにはまた同様な記述が見られるが、これらは1:1に対応しているわけではないから、たとえば「まぬけ」を見ると、「どじ、へま」が加わり、それぞれ独自の解説がある。それらを追って行くだけでも、結構面白い読み物となる。なにか文章を書くときに、自分にも相手にもふさわしい表現がないかと開いてみる、本邦初の辞典である。

(金井弘夫)

□奥田 實：生命樹 TREE OF LIFE A4. 392 pp. 2010. ¥9500+税. 新樹社. ISBN 978-4-7875-8607-0.

美しい装丁の書物である。著者は埼玉県に生まれ、1986年に大雪山山麓の北海道東川町に移り住む。その大雪山の麓に居を構え、四季折々の森の姿と森を構成する樹々をカメラで捉えた写真集である。しかしながら、これは単なる写真集ではない。

北海道に自生する150種の木本植物を対象として、A4大の見開き、種によってはA4一ページに紹介している。その中身は、全体、花序、果序、花や果実のアップ写真などのパーツがコラージュの手法を用いて組み合わせられた写真図鑑である。例えば、ページ中程のオオタカネバラとカラフトイバラを見てみよう。それぞれの種で、冬芽、刺のついた茎、蕾、咲ききった花、果実（偽果）、種子が対比されるかたちで描かれている。こうして比較すると、普通2種の区別点とされる刺、小葉や果実の違いのほか、萼裂片や托葉、種子も明瞭に違うことが分かる。こうしたコラージュの場合、スケールを示すことが難しいが、本書では大まかにサイズが記されている。

全体の構成は次のとおり。第1章 緑深き原生林の主役たち、第2章 みずみずしい森の高木たち、第3章 心を癒す森の担い手たち、第4章 可憐に咲くしなやかな樹冠、第5章 はじける果実、風に舞う種子、第6章 実を結び彩りを添える、第7章 わき役たちの表舞台。本誌の読者であれば、その大まかな内容を思い描くことができるのではないだろうか？取り上げた150種について、各種のさまざまなステージを紹介し、全体としての森の成り立ちを示すということから、本書の英文副題が『TREE OF LIFE』となっているのだろう。完成まで10年を要したという。10年間の制作活動を通じて得た画像や知見はかなりの量に上ると思われるが、恐らくその全てを盛り込むことが困難だったに違いない。

本書の謳い文句は、『21世紀の新しい植物図鑑』である。昨今のパソコンとデジカメ、そしてプリンタの発達により、パーツの画像をモニター上で構成する、という手法が身近なものになってきている。この手法によると、瞬間を切り取る画像を組み合わせることによって、時間的な推移を表現することができる。各パーツの表現とその構成に

は撮影者の個性が反映されるはずだから、取り扱う被写体（種）が同じであっても、一つとして同じ図鑑にはならないだろう。本書がこれからの植物図鑑の一つの方向を示していることは間違いないだろう。

（門田裕一）

□植村修二・勝山輝男・清水矩男・水田光雄・森田弘彦・廣田伸七・池原直樹：日本帰化植物写真図鑑第2巻 B6. 579 pp. 2010. ¥5,000＋税. 全国農村教育協会. ISBN 978-4-88137-155-8 C3645.

本誌83巻4号(2008年)で紹介した同名の本の続編である。前編では600種、本編では500種が示されている。これらは帰化植物に関心を持つ二つの全国組織が、電子メールを介して情報交換しながら蓄積したデータベースに基づき、参加者から提供された画像を編集したもので、現在わが国で知られている帰化植物のほとんどすべてを網羅しているとのことである。

スタイルは前編と同じで、まえがき、帰化植物について、目次、凡例に続いて、科別にまとめられた植物が、一ページ種類ずつ、全形、部分、ときには近縁種のカラー写真と共に、圧縮された説明があり、[文献]、[種子]、[分布情報]の見

出しが続く。[文献]では、509頁以降にある文献一覧の該当頁が記されているが、そこを見ると本文と同じ順序に並べられた和名ごとに、文献名(複数)と参照すべき頁が一タ記されている。[種子]は、475頁以降にある種子写真の該当頁を示す。[分布情報]は都道府県ごとに、その植物が含まれている文献の著者、発表年、文献名、その中の表題までがわかる。帰化植物は動きや盛衰が激しいので、この部分が蓄積されれば、その動態を記録に留めるのに有効だろう。大量のデータベースの扱いに慣れていないと、こういう編集はできないと思う一方、データベースの維持・管理の苦勞が察せられる。なお沖縄については391-468頁にまとめられている。前編と同様、コラムと名付けた記事が47件、あちこちに挿入されているが、前編では特定のトピックについての解説が多かったのに対して、本編では前編の追補だったり、ニュース的なものだったり、スケールが少々小さくなった。和名、学名、英名の索引は前巻と共通に使えるようになっている。新和名がいくつか発表されているが、和名索引にマークをつけるなり、字体を変えるなりして、見つけやすくしてくれるとよかった。

（金井弘夫）